

スペイン・バスク州のミシュラン星レストランシェフら来町

スペイン・バスク州のミシュランガイド星レストランのシェフらによる視察団（マリアーノ・ゴメス代表、6人）が10月、調査研究事業「ビルバオ北海道プロジェクト」で来道しました。地元ビルバオ地方の昆布など海藻類の食用活用の模索とアイヌ文化の探求を目的に道内を巡りました。



10月13日に来町。ウポポイを見学した後、白老コミセンでアイヌ伝統料理を体験。白老アイヌ協会会員の指導でチュプオハウ（サケの汁物）やチポロラタシケ（イクラとジャガイモの煮物）などを作り、試食しました。三つ星、一つ星レストランのシェフなどそうそうたるメンバーが、真剣に取り組んでいました。

バスク人はヨーロッパで最も古い民族とも言われ、独自の文化や言語を持っていましたが、スペインとフランスによる領土争い、フランコ政権（1939～75）下での文化や言語への迫害など歴史をもつ民族です。山丸和幸同協会理事長とゴメスさんの懇談は、民族の歴史が似ていることに共感。「日本はアイヌ語をどうして学校で教えないのですか」「自然と結びついて暮らすアイヌとバスク人は似ていますね」「伝統をどうやって若い世代に伝えていますか」などお互いの質問で弾み、理解を深めていました。今回プロジェクトの企画などコーディネーター役を務め、双方の架け橋となった遊佐順和札幌国際大教授は「お互いに感動や気づきがあれば」と成果に期待していました。

アイヌ民族の伝統文化 国内外へ発信



白老町×ウポポイフェアin仙台&東京



10月15、16日は仙台市青葉区の商業施設、11月5、6日は東京・新宿高島屋で、関係者がアイヌ文化やウポポイ、白老の観光・物産品の魅力をPRしました。ムックリ演奏や歌の披露ほか、弓矢体験、プレスレット工作体験なども人気を呼び、パンフレットやノベルティの配布、特産品販売と、計4日間で9千人ほどの来場者で盛り上がりました。11月下旬は名古屋で同様なプロモーションを行いました。

「白老アイヌの手仕事」 工芸品展示会

白老アイヌ協会（山丸和幸理事長）の主催。町内在住の作家やサークルメンバー約50人による手作り作品約80点が、一堂に展示された初の企画。丹念に作られたアイヌ文様刺しゅうや着物、タペストリー、木彫、バッグ、名刺入れなどに来場者が関心を寄せていました。

山丸理事長は「先人たちから受け継いだ伝統文化をどういう形で傳承しているかを見てもらい、アイヌ民族への理解が深めてもらいたい。継続して開催したい」と話していました。（10月20～23日、白老コミセン）



知っておこう アイヌ文化

ヤラチプ

イランカラプテ。10月8日から11月5日の毎週土曜日、全5回にわたって、チキサニで開催された海のイオル「サケの食文化体験」では、総勢100人ほどが参加し、サケの解体体験やサケを使ったアイヌ民族の伝統食試食体験を通して、アイヌ文化とサケのつながりについて学んでいただきました。また、川や湖、海で交易や漁撈などに活躍した舟について、チキサニに常時展示しているチプ（丸木舟）とイタオマチプ（板綴り舟）を見学してもらいながら、解説を行いました。

アイヌ民族の舟は、大まかに丸木舟、板綴り舟、そして、樹木のある部分を使った舟の計3種類に分類することができます。さて、最後の1種類はどんな舟か、皆さんはご存知でしょうか？答えは木皮舟です。それは、ヤラチプと呼ばれるキハダの木皮で作る舟で、直径40cm程の立ち姿の良いキハダから、切り株を高さ1m程残し、その上から全長5mほどのヤラチプが作れる、枝やこぶがない樹皮を確保できる木でなければ作ることができません。樹皮を火で炙って柔らかくし、折り曲げて作られたヤラチプは、軽量で安定性もよく、川で荷物を運ぶのに適していたと言います。樹木から1枚ものとして剥ぐ樹皮を意味するヤラと言え、チキサニでは、令和元年6月にシラカバの樹皮を使って、ミニ体験「ヤライタンキ（樹皮のお椀）作り体験」を開催しましたが、今回改めて、樹皮を生活用具に生かしたアイヌ民族の知恵を知っていただくことができました。政策推進課 アイヌ政策推進室 学芸員 森洋輔



海のイオルでチプとイタオマチプを見学する参加者ら

問い合わせ先：イオル事務所 チキサニ ☎82-6301